

# ダニエルの書 - 第一百八十七番

獅子の啓示：パニウムから最後の封印まで

Jeff Pippenger

2024-04-17

イエスが預言の真理の封印を解くとき、彼はユダ族の獅子として表される。そしてカイサリア・フィリピにおいて、ユダ族の獅子は、「彼はエルサレムに行き、長老たちと祭司長たちと律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならない」との真理の封印を解き始めた。これらの真理は、十四万四千人の封印の時期の初めに彼が封印を解いたメッセージと一致し、そして同じ期間の終わりにも、彼が再び封印を解いたメッセージと一致する。これらの真理はまた、ダニエル書11章13節から15節に表されているメッセージとも一致している。

彼がその真理の封印を解き、それを十四万四千人に明らかにする際には、「行に行を重ねる」方法論によってそうする。なぜなら、そこに神の国への「鍵」が見いだされるからである。それらの真理は、神の国への鍵であるため、食べなければならない。また、神の国は彼の民のうちにあるべきものだからである。

そして、パリサイ人たちに神の国はいつ来るのかと尋ねられたとき、彼は彼らに答えて言った。「神の国は目に見えるようには来ない。

また、『見よ、ここにある』とか『見よ、あそこにある』とも言われぬ。

見よ、神の国はあなたがたのうちにあるからである。」 ルカ 17:20、21

悪霊どもも信じておののく。というのも、単に信じるだけでは十分ではなく、「真理」は実際に食べる食物がそうであるように、あなたの一部とならなければならないからである。十三節から十五節の歴史において、ユダ族の獅子は、まもなく到来する日曜法令に関わる真理の封印を解き、そしてそれらの真理は、差し迫る危機に先立って、賢い乙女たちの額に印を押す。ユダ族の獅子は、マタイ第十六章の証言を十分に知っており、カイサリア・ピリピへの彼の訪問は、ダニエルのパニウムに関する証言と一致していた。また、カイサリア・ピリピで彼と彼の弟子がその下に立っていた十字架の影が、彼の終わりの日の民の歴史において来たる日曜法令の影を表していることを知っていた。

そのときから、イエスは弟子たちに、ご自分がエルサレムに行かなければならず、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを示し始められた。するとペテロはイエスをわきへ連れて、いさめ始め、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません」と言った。ところがイエスは振り向いてペテロに言われた。「サタンよ、引き下がれ。あなたはわたしのつまずきだ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っているからだ。」それからイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。自分のいのちを救おうとする者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者はそれを見いだすのです。たとえ人が全世界を手に入れても、自分のいのちを損じたら、何の益になりましょう。自分のいのちの代わりに、人は何を与えることがで

きるでしょうか. やがて人の子は、御使いたちとともに、父の栄光のうちに来ます. そのとき、それぞれの行いに応じて報いを与えるのです. まことに、あなたがたに言います. ここに立っている人々の中には、人の子が御国を持って来られるのを見るまで、決して死を味わわない者がいます.」マタイによる福音書 16:21-28.

まず第一に、したがって「初出の法則」に基づけば、十字架の苦難についてイエスが弟子たちに語られた最も重要なことは、もし彼に従うことを選ぶなら、自分の十字架を負わなければならないということである. ホワイト夫人は、十字架は同時にくびきでもあると明確に述べている. くびきと十字架は人の個人的な意志の象徴であり、すべては意志を正しく行使することにかかっている. 神の神殿を支える力は、屠られて「柱」に掛けられた小羊である. 屠られた小羊は、下なる肉的本性の十字架刑を表しており、その死んだ肉が掛けられている「柱」は意志である. キリストは、御自分の意志を常に御父の御心に服させることによってどのように勝利するか模範を示され、その業を成し遂げて、御父と共に御座に着かれた. 勝利の象徴は、柱に掛けられた屠られた小羊である. これらすべての真理は、ペテロに代表される者たちと直接関係している.

エクセターの天幕によって代表されるフィラデルフィアに向けて、次のように述べられている:

勝利を得る者を、わたしの神の宮の柱とし、彼はもはや外に出て行くことはない. わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都の名、すなわち天から、わたしの神のもとから下って来る新しいエルサレムの名を書き記す. さらに、わたしの新しい名を彼の上に書き記す. 耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい. ヨハネの黙示録 3章12、13節.

キリストが勝利したように勝利を得る者は、シモン・バルヨナがそうであったように新しい名を受けよう. また、キリストが神の神殿でほふられ、柱に掛けられた小羊であるのと同様に、彼らは神の神殿の柱となるだろう. 彼らがキリストが勝利したように勝利を得るとき、キリストがそうしたように、彼らも天にある御座に座るだろう.

ウォータウンの天幕によって代表されるラオディキアに対して、こう記されている:

見よ、わたしは戸口に立って叩いている. だれかがわたしの声を聞いて戸を開くなら、わたしはその人のところに入り、その人と共に食事をし、その人もわたしと共に食事をす. 勝利を得る者には、わたしが勝利を得て父の王座で父と共に座っているように、わたしの王座でわたしと共に座らせよう. 耳のある者は、御霊が諸教会に語ることを聞きなさい. ヨハネの黙示録 3:20-22.

イエスが十字架の苦難を語り始められたとき、弟子たちに最初に告げた真理は、人は、イエスご自身が打ち勝つ模範を示されたとおりに、まったく同じように打ち勝たなければならないということであった. 人は、情と欲とともに肉を十字架につけなければならない. これがなされたとき、彼らは天にあるところに座らせられる.

私たちが罪のうちに死んでいたときでさえ、キリストと共に私たちを生かし（あなたがたは恵みによって救われたのです）、また私たちを共によみがえらせ、キリスト・イエスにおいて天にあるところに共に座らせてくださいました. エペソ人への手紙

## 2章5、6節.

個人的責任の観点から十字架の真理を提示した後、ユダの部族の獅子は、終わりの時代に関するもう一つの真理を加えた。

人がたとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったなら、何の益があろうか。あるいは、人は自分のいのちと引き換えに何を与えることができようか。人の子は天使たちとともに、父の栄光のうちに来られる。そのとき、各人にその行いに応じて報いるであろう。まことにあなたがたに言う。ここに立っている者の中には、人の子がその王国とともに来るのを見るまで、死を味わわない者がいる。マタイによる福音書 16:26-28

十四万四千人の封印の終結期に、ユダ族の獅子によって真夜中の叫びのメッセージが封印を解かれるとき、死を見ない者たちがいるだろう。彼はそのとき、死を味わわない終末の民、すなわち十四万四千人に特に語りかけられた。ゆえに、カイサリア・ピリピを訪れてから六日後、ユダ族の獅子は、差し迫った十字架の危機に備えて弟子たちを強めるため、ある真理の封印を解かれた。しかしそれは、より重要には、まもなく来る日曜法について語っていた。

六日ののち、イエスはペテロとヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネを連れて、人里離れた高い山に登られた。すると、彼らの目の前で御姿が変わり、その御顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエスと語り合っていた。そこでペテロが口を開いてイエスに言った、「主よ、ここにいるのは私たちにとって良いことです。もしよろしければ、ここに仮小屋を三つ建てましょう。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」彼がまだ話しているうちに、見よ、輝く雲が彼らを覆い、雲の中から声がして言った。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者。彼の言うことを聞け。」弟子たちはこれを聞いて、顔を地に伏せ、非常に恐れた。するとイエスが近づいて彼らに触れ、「起きなさい。恐れることはない」と言われた。彼らが目を上げると、ただイエスのほかにはだれも見えなかった。彼らが山を下って来るとき、イエスは彼らに命じて言われた。「人の子が死者の中からよみがえるまでは、この幻をだれにも話してはならない。」すると弟子たちはイエスに尋ねて言った。「それでは、律法学者たちは、まずエリヤが来なければならぬと言うのはなぜですか。」イエスは答えて言われた。「確かに、エリヤはまず来て、すべてのことを回復する。しかし、わたしはあなたがたに言う。エリヤはすでに来た。だが、人々は彼を認めず、思いのままに彼にした。人の子もまた同様に、彼らによって苦しみを受けるであろう。」そのとき弟子たちは、イエスが彼らにバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った。マタイによる福音書 17:1-13

この箇所では、ユダ族の獅子が、「時は近い」ゆえに、恩恵期間の終わりの直前に、十四万四千人を封印する真理の封印を解いている。彼はまず十字架の苦しみを指し示し、その経験こそが、肉を十字架につけるにあたり自らの意志を働かせることを拒む一群と、キリストの模範に従う一群とを分ける決定的な違いであると示した。次に彼は、彼らが地上の歴史の最後の世代を代表していること、すなわち、2001年9月11日に封印が解かれた時から彼の再臨に至るまで生きる人々がいる時代であることを示した。

そのとき、イエスは栄光のご自身の姿の幻を示され、モーセとエリヤが共に現れた。解かれた封印のメッセージとは、モーセとエリヤに結びつけられている「イエス・キリストの啓示」であり、そのメッセージは、ヨハネの黙示録11章の二人の証人、すなわちモーセとエリヤが、十四万四千人の封印を表す象徴として順を追って確立されたとき、2023年7月に解き明かされ始めた。三人の弟子たちがその幻を見て神の声を聞いたとき、彼らは地にひれ伏して、ひどく恐れた。するとイエスが来て彼らに触れ、「起きなさい。恐れることはない」と言われた。

三人の弟子が見た幻は、終わりの日におけるキリストの栄光の幻を表しており、ゆえにダニエルが第十章で見た幻と同じものである。

私、ダニエルだけがその幻を見た。私と共にいた人々はその幻を見なかったが、大きな震えが彼らに臨み、彼らは身を隠そうとして逃げた。こうして私はひとり残され、この大いなる幻を見た。すると私のうちには力が全く残らなかった。私の容貌は変わり果て、力を保つことができなかった。それでも私は彼の言葉の声を聞いた。彼の言葉の声を聞いたとき、私は顔を地に向けて深い眠りに落ちた。すると見よ、一つの手が私に触れ、私を膝と手のひらをついて支える姿勢に起こした。彼は私に言った。「おお、ダニエル、大いに愛されている人よ、私があなたに語る言葉を悟り、まっすぐに立ちなさい。今、私はあなたのもとに遣わされたのだ。」彼がこの言葉を私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。すると彼は私に言った。「恐れるな、ダニエルよ。あなたが悟ろうと心を定め、あなたの神の御前で身を戒めた最初の日から、あなたの言葉は聞かれた。私はそのあなたの言葉のゆえに来たのだ。」 ダニエル書 10:7-12

マタイによる福音書第十七章の変容の幻は、ダニエル書第十章の鏡の幻視であり、それはエゼキエル書の干からびた骨がよみがえらされる時に起こる。その幻とそれに伴うメッセージは、礼拝者を二種類に明らかにする。一方はエクセターの天幕に、もう一方はウォータータウンの天幕に属し、後者はエレミヤの「あざける者の会衆」であり、ヨハネの「サタンの会堂」である。ダニエルの証言におけるその幻の影響と同様に、「弟子たちはこれを聞いて、ひれ伏し、非常に恐れた。イエスは近づいて彼らに触れ、『起きなさい。恐れることはない』と言われた。」その幻はどちらの場合も聴覚的かつ視覚的であり、いずれの例でも恐れを引き起こした。いずれの証言においても、力づけるために「触れること」が必要とされた。

変容の幻は、ほかのこととともに、神の御言葉が決して失敗しないことの証拠であった。というのも、マタイによる福音書16章の最後の節で、イエスは「ここに立っている者の中には、人の子がその御国をもって来るのを見るまでは、死を味わわない者がいる」と述べておられたからである。変容は、「人の子」がその御国に来られることの例証であった。

変貌の山において、モーセは罪と死に対するキリストの勝利の証人であった。彼は、義人の復活の時に墓から出てくる者たちを代表していた。死を見ることなく天に移されたエリヤは、キリストの再臨の時に地上に生きていて、「最後のラッパに際し、たちまち、まばたきする間に」変えられる者たち、すなわち「この死ぬべき者が不死を着」「この朽ちるべき者が不朽を着」ときの人々を代表していた。（コリント第一 15:51-53）イエスは、「罪を負うことなく救いのためにふたたび来られる」ときに現

れるように、天の光をまとしておられた。というのも、主は「聖なる御使いたちとともに、御父の栄光のうちに」来られるからである。（ヘブル 9:28; マルコ 8:38）救い主が弟子たちに与えた約束は、今や成就した。山の上では、来たるべき栄光の御国が縮図として示された。王であるキリスト、復活した聖徒たちの代表としてのモーセ、そして携え上げられる者たちの代表としてのエリヤ。The Desire of Ages, 421.

封印の真理には、十四万四千人は黙示録第七章に表されている、死を見ない者たちであり、エリヤに象徴されている、という特定が含まれている。また、黙示録第七章の大群衆は、死ぬ者たちであり、モーセに象徴されている、ということも含まれている。一方の群衆は黙示録第十八章の第一の声で召され、もう一方の群衆は同章の第二の声で召される。

彼らに触れた後、イエスは弟子たちにさらに教えを与え、こう言われた。「人の子が死人の中からよみがえるまでは、この幻をだれにも話してはならない。」変容の幻、すなわち鏡の幻、イザヤ書6章におけるイザヤの幻、第三の天にいたときのパウロの幻、そしてエゼキエルの「車輪の中に車輪」の幻は、キリストの復活の後まで、ユダの部族の獅子によって封印された。

キリストの復活は、まさにその幻の中でキリストと共にいた二人の証人の復活を表しており、彼らは2023年7月に復活することになっていた。その時点で、封印されたメッセージは黙示録十一章の二人の証人と忠実な二つの群衆に明かされ、それは世の終わりにおけるキリストの栄光の鏡の幻視という文脈に位置づけられることになる。

封印のメッセージは、黙示録1章の最初の三節の文脈の中にも位置づけられる。そこでは、神性と人間性の結合を表す伝達の連鎖が、封印のメッセージが十四万四千に数えられる候補者にどのように提示されるかという段階的な過程として示されている。

段階を追った過程は、父から、子へ、天使ガブリエルへ、ヨハネへ、諸教会へと伝えられた。神なる父から、神であり人である御子へ、墮落していない被造物（ガブリエル）へ、墮落した被造物（ヨハネ）へ、アジアにある諸教会（世界）へ。これら五つの段階は、『イエス・キリストの黙示』が最初に言及される箇所ですべて具体的に示されており、いずれか一つを否定することはすべてを否定することに等しい。

その啓示に照らして、弟子たちはイエスにこう尋ねた。「では、なぜ律法学者たちは『まずエリヤが来なければならない』と言うのですか。」イエスは彼らに答えて言われた。「確かにエリヤはまず来て、すべてを回復する。しかし、わたしはあなたがたに言う。エリヤはすでに来たのに、彼らは彼を認めず、望むままに彼にした。同様に、人の子もまた彼らによって苦しみを受けることになる。」そのとき弟子たちは、イエスが彼らに語っていたのはバプテスマのヨハネのことだと悟った。

洗礼者ヨハネと黙示録のヨハネの預言的役割は封印のメッセージの一部であり、ウォータウンの天幕でサミュエル・スノーのメッセージを無視することを選んだ人々は、主がご自身の選ぼうとされる人をお選びになることを認めようとしないうる者たちを表している。1989年に選ばれたその声は、1776年から二百二十年後である1996年にそのメッセージを初めて公にし、2001年9月11日に第三のわざわいが到来したことを特定した見張り人であり、2020年7月18日の罪のメッセージを提示したが、これも封印のメッセージの一部であ

り、その役割は洗礼者ヨハネによって表されている。

この研究は次回の記事で続けます。

私は、嚴重に守られ、堅く立っている一団の人々を見た。彼らは、会衆の確立された信仰を動揺させようとする者を一切容認しなかった。神は彼らを嘉してご覧になった。私は三つの段階-第一、第二、第三の天使のメッセージを示された。私に同行していた天使が言った。「これらのメッセージの一つの石材を動かしたり一本のくぎを揺り動かしたりする者には災いあれ。これらのメッセージの真の理解は極めて重要である。魂の運命は、それらがどのように受け入れられるかにかかっている。」私は再びこれらのメッセージをたどらされ、神の民がその経験をいかに高い代価を払って得たかを見た。それは多くの苦難と激しい闘争を通して得られたものだった。神は一步一步彼らを導き、ついには彼らを堅固で動かされない土台の上に立たせた。私は、人々がその土台に近づいて基礎部分を調べるのを見た。喜びながら直ちにその上に踏み出した者もいた。別の者たちはその基礎に難癖をつけ始めた。改良が施されれば、その土台はさらに完全になり、人々はもっと幸せになるのだと望んだ。中には、調べるためにその土台から降りて、それは誤って据えられていると宣言する者もいた。しかし、ほとんどの者はその土台の上にしっかりと立ち続け、降りてしまった者たちに不平をやめるよう勧めていた。というのも、神こそ大棟梁であり、彼らは神に敵対しているのだから。彼らは、自分たちを堅固な土台へと導いた神の驚くべき御業を語り、心を一つにして天に目を上げ、声を上げて神をあがめた。このことは、不平を言って土台を離れていた者の何人かの心を動かし、彼らはへりくだった面持ちで再びその上に踏み出した。

私は、あらためてキリストの初臨の告知に目を向けるよう示された。ヨハネは、イエスの道を備えるために、エリヤの霊と力をもって遣わされた。ヨハネの証しを退けた者たちは、イエスの教えから益を受けることがなかった。その到来を予告するメッセージに反対したことによって、彼らは、彼がメシアであることを示す最も確かな証拠を容易に受け入れられない立場に自らを置いた。サタンは、ヨハネのメッセージを拒んだ者たちをさらに先へと駆り立て、キリストをも拒み、十字架につけるに至らせた。こうして彼らは、彼らに天の聖所へ入る道を教えるはずであった五旬節の日の祝福を受けることのできないところに自らを置いてしまった。神殿の幕が裂けたことは、ユダヤ人の犠牲と儀式がもはや受け入れられないことを示していた。大いなる犠牲はささげられ、受け入れられた。そして五旬節の日に降った聖霊は、弟子たちの心を地上の聖所から天の聖所へと向けた。そこへは、イエスがご自身の血によって入り、弟子たちにご自身の贖いの効力を注ぐためであった。しかし、ユダヤ人たちは全くの暗闇の中に取り残された。彼らは、救いの計画について持ち得たはずのすべての光を失い、それでもなお、そのむなしい犠牲と供え物に信頼し続けた。天の聖所が地上の聖所にとって代わっていたが、彼らはその変化を何も知らなかった。ゆえに彼らは、聖所におけるキリストの執り成しから益を受けることができなかった。

多くの人々は、キリストを退け、十字架につけたユダヤ人の歩みを恐怖をもって見つめ、主が受けられた恥ずべき辱めの歴史を読むと、自分たちは主を愛しており、ペテロのように主を否むことも、ユダヤ人のように主を十字架につけることもなかったらうと考える。だが、すべての人の心を読み取られる神は、彼らが感じていると公言し

たイエスへの愛を試みに向けられた。天のすべては、第一の天使のメッセージがどのように受け入れられるかを、最も深い関心をもって見守った。ところが、イエスを愛していると公言し、十字架の物語を読んで涙を流した多くの者が、主の来臨の良き知らせをあざけた。彼らはそのメッセージを喜んで受け入れるどころか、それを迷妄だと言い張った。彼らは主の現れを愛する人々を憎み、教会から締め出した。第一のメッセージを退けた者は第二によって益を受けることができず、また、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る備えをするはずの真夜中の叫びによっても、益を受けなかった。そして前の二つのメッセージを拒んだために、彼らの悟りは暗くなり、至聖所への道を示す第三の天使のメッセージのうちに光を見いだせなくなってしまった。私は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、名ばかりの教会がこれらのメッセージを十字架につけてしまい、その結果、至聖所に至る道を何も知らず、そこでイエスのとりなしから益を受けることができないのを見た。無益な犠牲をささげたユダヤ人のように、彼らはイエスが去られた区画にむなしい祈りをささげる。欺きが成功して喜んだサタンは、宗教的な装いをまとい、これら自称クリスチャンの心を自分の方へ導き、自らの力とするしと偽りの不思議をもって働き、彼らを自分のわなに縛りつける。彼はある者をこのように、別の者をあのように欺く。さまざまな心に作用する種々の惑わしを用意しているのだ。ある欺きには戦慄を覚えながら、別の欺きはたやすく受け入れる者もいる。サタンは心霊主義によっても人々を欺く。また彼は光の御使いを装って現れ、偽りの改革運動を手段として、その影響を国中に広げる。教会は有頂天になり、神が自分たちのために驚くべき御業をなしておられると考えるが、それは別の霊のわざである。その興奮はやがて消え去り、世も教会も以前より悪い状態に取り残されるだろう。

私は、名ばかりのアドベンチストや墮落した諸教会の中にも、神には正直な子らがいるのを見た。そして、災いが注ぎ出される前に、これらの教会から牧師たちや人々が呼び出され、喜んで真理を受け入れるだろう。サタンはこのことを知っている。そこで、第三天使の大いなる叫びが与えられる前に、彼はこれらの宗教団体の中に興奮を巻き起こし、真理を退けた者たちに、神が自分たちと共におられると思わせる。彼は正直な者たちを欺き、神がなおも教会のために働いておられるのだと彼らに思わせようと望んでいる。しかし光は輝き、正直な者は皆、墮落した諸教会を離れ、残りの民の側に立つであろう。『初期の著作』258-261。